

2024年09月08日（日） 13:20 - 15:00（ウェブ発表）

日本心理学会第88回大会

発表 3C-057-PO

不使用型はナイーブ？

友人関係における状況に応じた切替の4類型別の、友人数、多
様性志向、LSO-U、LSO-E、精神内的罪悪感、対人摩耗の比較

第3版（2024年08月29日：再調整）

大谷 宗啓 (OHTANI, Munehiro)

（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科：滋賀大学配属）

ohtani_m@outlook.com



「状況に応じた切替」 (大谷, 2007; 2019)

1990年代後半に登場した「選択化論」が注目した特徴を2つの下位概念で整理したものの。

対象切替：状況に応じて関係対象（友人）を切り替えること

項目例「どこに何をしに行くかによって、最初に誘う友人は違う。」

自己切替：状況に応じて自己のあり方を切り替えること

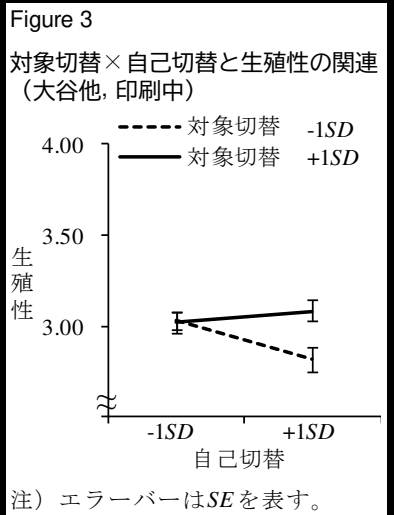
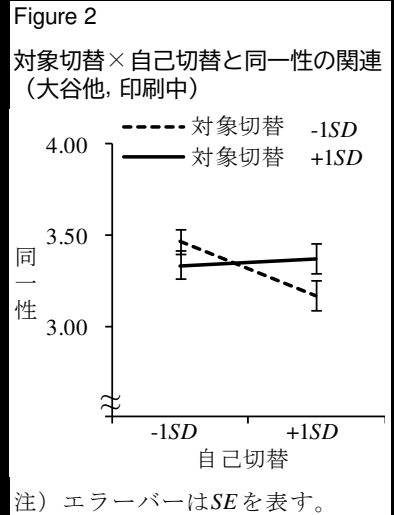
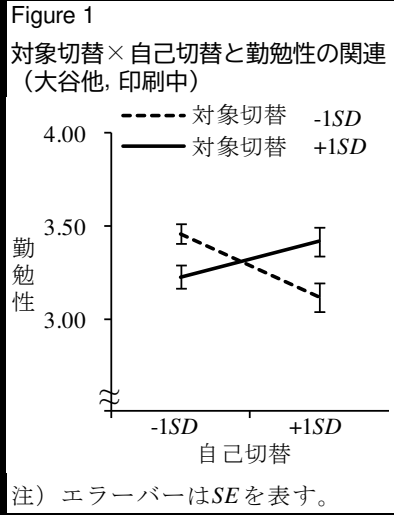
項目例「どんな友人と一緒にいるかによって、自分のキャラ（性格）が変わる。」

…選択化論では、対象切替（に相当する特徴）と自己切替（同左）は「当然のものとしてセットにされて」いた（菅原, 2011, p.44）

しかし、相関は想定外に小さく（e. g. 菅原, 2011），

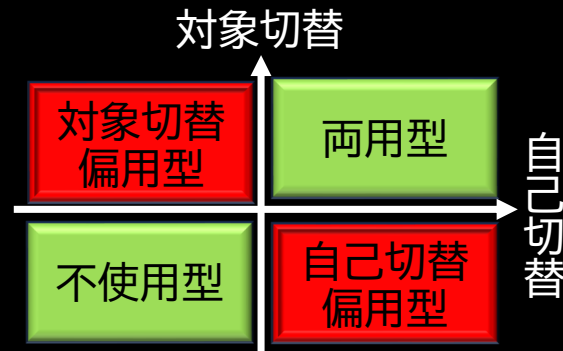
片方を偏用している者もかなりの割合に上る（Matsushima, 2016; 大谷, 2013）

組み合わせに着目する必要



- 対象切替・自己切替の片方を偏用している者は、偏用していない者に比べて適応状態が悪い。
- 共同体との折り合いに重点が置かれる発達主題得点との関連において、発達状態のアセスメントで問題となる範囲の値をとるか否かを左右する。
- それらの結果は、年齢層（大学生・成人）・性・対人ストレス経験頻度の高低に調整されない。

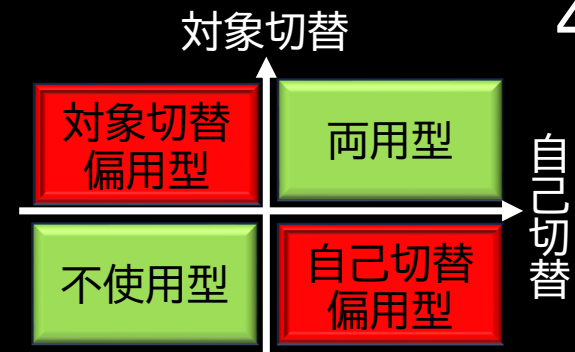
不使用型と両用型は適応的で、「対象切替偏用型と自己切替偏用型」は不適応的と（一応）考えられる。



→異なる調査間で
対照しやすいように、
標本平均値ではなく
評定語の中性値を群
分け基準として、

状況に応じた切替の4類型

「一応」という理由は…



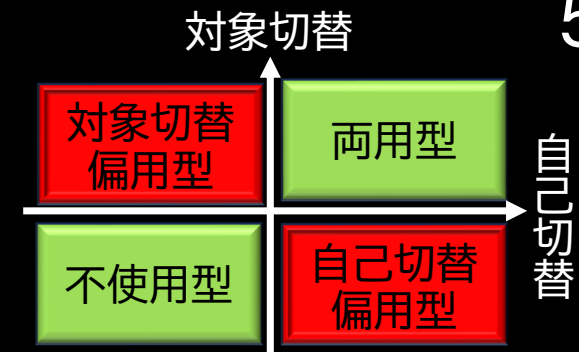
- 友人関係研究では、不使用型の特徴に近い者（誰とでも「ありのままの自分」で付き合う者）が高い適応感を示してきた。
- 両用型に相当する者の適応感も、不使用型に相当する者と比肩する高さを示す（Matsushima, 2016）。

友人関係研究の蓄積に照らせば、不使用型と両用型の適応感の高さは不思議ではない。
…しかし、対人関係全般の研究蓄積に照らせば…

互恵的な相互調整であるはずの親密な対人関係において、相手を選ばず、誰に対しても同じ自己が活性化される≡調整をしない不使用型が高い適応感を示すのは、不可解、あるいは特徴的なことなのではないか？

➡ 本研究のRQ 「不使用型とは、どのような人々なのか？」

調整抜きで高い適応感を維持できる？ …できる。



- 友人関係を相性が良い相手に限定する場合。

「気が合う奴はどんどん仲良くなっていく」, 「特定の奴としか付き合わなくなる」 (大谷, 2019の面接協力者)

➡ 仮説 1: 不使用型の者は他の者に比べ, 多様性志向が低い

- 特に何もしなくても, 誰とでも親密な関係を形成・維持できて来た場合。

例えば, 個人的魅力や集団内地位の高さ等, 相手側の片務的な調整を引き出す資源を持っていれば, 負担感を伴う切替 (大谷, 2019) は節約可能※。

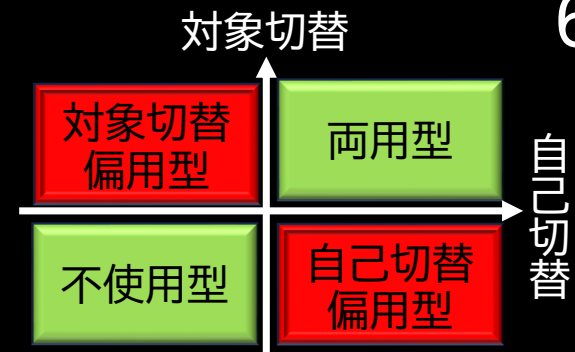
※そのような, 対称的互惠性 (Hartup & Stevens, 1997) に欠ける関係を友人関係と呼ぶのは適切か? という問題を脇におけば, 可能。

そうした場合, 相互理解の難しさに気づくことなく「みんなと仲良くできる」。

➡ 仮説 2: 不使用型の者は他の者に比べ, 相互理解の難しさ・人間の個別性への気づきが低い

もうひとつ…適応感が広範に低い自己切替偏用型とは？

そも、互恵的な相互調整であるはずの親密な対人関係において、「そんなこと俺に言われてもってことを考え」（大谷, 2019の面接協力者）**ずに**，自己切替一辺倒になるのはどのような人々か？



• 「何となく自分が悪い」と感じて（しまわざるを得ないで）いる人々？

➡ 仮説 3：自己切替偏用型の者は他の者に比べ，精神内的罪悪感（漸成発達理論における罪悪感）が高い

• 友人が少ないため対象切替ができない（だけではないかとよく指摘されます）

➡ 仮説 4：自己切替偏用型の者は他の者に比べ，友人数が少ない？

以上4つの仮説を検討するのが，本研究の目的。

方法

調査の概要

2023年8月から2024年2月、近畿地方の大学生601名にMS-Formsによる無記名式調査への回答を依頼し、331名の回答を得た。30歳以上の者と、現在の友人数を0名と回答した者を除く男性131名、女性196名、計327名を分析対象とした。平均年齢は19.66歳 ($SD = 1.22$)。

調査の内容

友人数 「今現在、あなたが『普段付き合っている同性の友人』は、何名ぐらいおられますか」。

状況に応じた切替 大谷 (2007, p.490) の対象切替7項目と自己切替7項目。4件法。

多様性志向 「同性の友人たちとの普段の付き合い方について、あなたの考えに最も近いものを、ひとつ選んでください」と尋ね、「色々なタイプの友人と付き合いたい」(4点)から「相性が良い友人との関係に集中したい」(1点)の4件法で回答を求めた。

孤独感 LSO (落合, 1983) の下位尺度 LSO-U (人間の理解・共感の可能性についての感じ(考え)方。高得点ほど、難しさに気づいていない) 9項目と、LSO-E (自己(人間)の個別性の自覚。高得点ほど自覚している) 7項目。原典通り「はい」(2点)から「いいえ」(-2点)の5件法。

精神的罪悪感 特性罪悪感尺度 (大西, 2008a) の下位概念「精神的罪悪感」7項目。原典通りの5件法。

対人摩耗 対人ストレスナー尺度 (橋本, 2005) の下位尺度「対人摩耗」6項目。原典通りの4件法。

状況に応じた切替の得点化

Table 1

状況に応じた切替尺度の因子パターンと記述統計量 (n=327)

項目	F1	F2	h^2	M (SD)
F1: 自己切替 (5項目, $\omega = .71$)				
06. どんな友人と一緒にいるかによって、自分のキャラ (性格) が変わる。	.85	-.02	.70	2.94 (1.01)
04. その場の雰囲気によって自分のキャラ (性格) が変わる。	.73	-.02	.52	3.00 (0.97)
10. 「明るく活発な私」と「物静かで落ち着いた私」というような矛盾するタイプの目標を、場合により使い分けている。	.51	-.03	.25	2.76 (1.03)
08. 自分がポケ役に回るかツッコミ役に回るかは、相手しただい。	.35	.02	.13	3.13 (0.99)
02. 02. 相手のノリ (反応) に合わせて話題を選ぶ。	.29	.11	.12	3.51 (0.71)
F2: 対象切替 (4項目, $\omega = .48$)				
03. 機嫌の良い日と悪い日とでは、一緒にいたい友人が違う。	.07	.51	.29	2.45 (1.15)
07. どこに何をしに行くかによって、最初に誘う友人は違う。	.01	.49	.24	3.31 (0.89)
01. 恋愛相談をする友人と、進路の相談をする友人とは違うと思う。	-.08	.40	.14	2.55 (1.10)
05. 一緒に昼食をとる友人と、暇なときに遊ぶ友人とは違う。	.14	.28	.13	2.41 (1.09)
(除外項目)				
[R] 13. 親しい友人とは、いつでも一緒にいたい。	—	—	—	2.22 (1.04)
[R] 09. どんな悩みを打ち明けるときも、同じ友人に打ち明けている。	—	—	—	2.38 (0.99)
[R] 14. 同じ友人に対する私の距離のとり方は、そうそう変わることはないと思う。	—	—	—	1.91 (0.90)
11. 何かを一緒にしていて相手のノリ (反応) が悪いときは、相手を変えてみる。	—	—	—	2.43 (0.92)
12. 自分が生き方の目標や手本にしている人たちは、タイプが色々なので、ひとつのイメージにしぼるのは無理だと思う。	—	—	—	2.99 (0.91)

注) [R]は逆転項目。最尤法、プロマックス回転、因子間相関 = .44, CFI = .970, RMSEA = .043。各項目の得点可能範囲は1 - 4。

挟み込み法 (堀, 2005) による検討の結果, 1因子1項目となった因子と, 逆転項目のみとなった因子を除外。

共通性の低い項目に着目すると, 文脈の限定が強い項目によって尺度の内的整合性が低くなっていることがうかがえる。要・改良。

以上の問題を認識した上で, 評定語の中性値を群分け基準とするために, 評定平均値を指標得点とした。

切替4類型の人数分布

Table 2

切替4類型の人数分布

性	LL	LH	HL	HH	分類不能	$\chi^2(4)$	ES:w	Holm法による多重比較
男 ($n=131$)	9.9%	24.4%	6.9%	47.3%	11.5%	72.93 ***	.75	LL・HL < LH < HH, 分類不能 < HH
女 ($n=196$)	10.2%	22.4%	8.2%	47.4%	11.7%	104.26 ***	.73	LL・HL・分類不能 < LH < HH
全体 ($n=327$)	10.1%	23.2%	7.6%	47.4%	11.6%	176.96 ***	.74	LL・HL・分類不能 < LH < HH

注) 不使用型をLL, 自己切替偏用型をLH, 対象切替偏用型をHL, 両用型をHHの略号で示した。男性は $w \geq .30$ で $1-\beta \geq .80$, 女性は $w \geq .25$ で $1-\beta \geq .80$, 全体は $w \geq .19$ で $1-\beta \geq .80$ 。多重比較は5%水準で有意な結果を示した。

*** $p < .001$

大谷他（印刷中）の大学生回答者の結果と整合的。

大谷他（印刷中）は単項目測定 + COVID-19による行動制限前のデータであるが、後掲の対人摩擦との関連も含め、分析結果は再現された。

LSO, 精神内的罪悪感, 対人摩耗の得点化

Table 3
LSOの因子パターンと記述統計量 (n=327)

項目	F1	F2	h^2	M	(SD)
F1: LSO-U: 人間同士の理解・共感の可能性についての感じ方 (9項目, $\omega = .87$)					
04. 私は、私の生き方を誰かが理解してくれると信じている。	.75	.18	.44	0.96	(1.10)
RJ 10. 私の生き方を誰もわかってくれはしないと思う。	.73	-.04	.57	0.99	(1.07)
RJ 07. 私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う。	.73	-.05	.57	1.08	(1.03)
06. 私の考えや感じを何人かの人はわかってくれると思う。	.71	.09	.44	1.29	(0.79)
RJ 14. 誰も私をわかってくれないと、私は感じている。	.67	-.08	.52	0.96	(1.20)
03. 私のことをまわりの人は理解してくれていると、私は感じている。	.66	.07	.38	0.75	(1.10)
RJ 01. 私のことに親身に相談相手になってくれる人はいないと思う。	.62	.04	.36	1.15	(1.10)
15. 人間は、互いに相手の気持ちをわかりあえると思う。	.50	-.03	.27	0.74	(1.09)
02. 人間は、他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができると思う。	.48	-.02	.24	1.42	(0.84)
F2: LSO-E: 人間の個別性の自覚 (5項目, $\omega = .80$)					
09. 人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う。	.04	.92	.80	-0.24	(1.46)
11. 結局、人間は、ひとりで生きるように運命づけられていると思う。	-.03	.78	.63	-0.73	(1.27)
05. 結局、自分はひとりでしかないと思う。	-.28	.49	.48	-0.11	(1.40)
08. 自分の問題は、最後は、自分で解決しなくてはならないのだと思う。	.16	.32	.07	1.43	(0.80)
16. どんなに親しい人も、結局、自分とは別個の人間であると思う。	.03	.26	.06	1.39	(0.86)
(除外項目)					
RJ 12. 私とまったく同じ考えや感じをもっている人が、必ずどこかにいると思う。	—	—	—	-0.43	(1.41)
13. 私の人生と同じ人生は、過去にも未来にもないと思う。	—	—	—	1.11	(1.25)

注) [R]は逆転項目。最尤法, プロマックス回転, 因子間相関 = $-.57$, CFI = $.857$, RMSEA = $.109$ 。各項目の得点可能範囲は $-2 - +2$ 。

挟み込み法 (堀, 2005) による検討の結果, 原典通りの2因子解を採用。

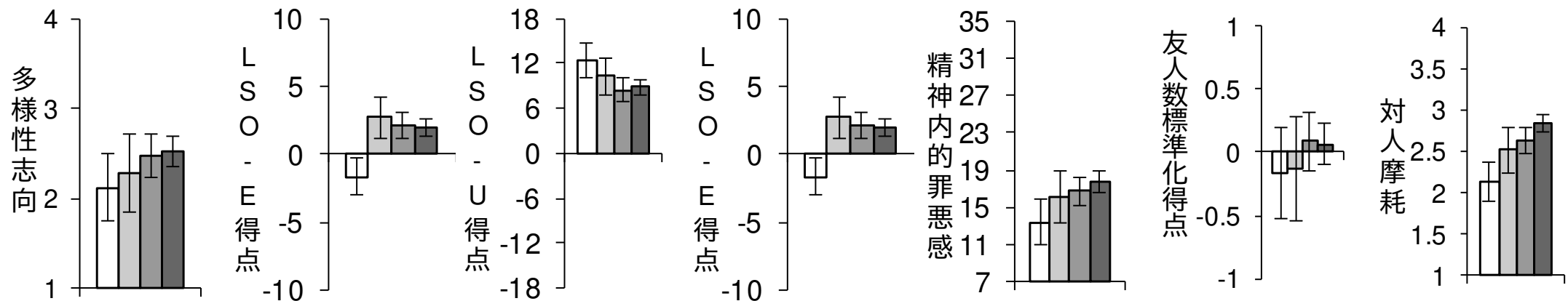
共通性が極端に低い2項目を除外。なお, この2項目は藤原・石田 (2011) と芝崎・芝崎 (2020) でも除外されている。

精神内的罪悪感と対人摩耗は, 挟み込み法により1次元性が確認され, 内的整合性も順に $\omega = .92$, $\omega = .85$ と十分な値であった。いずれも評定平均値を指標得点とした。

切替4類型間での得点比較

Figure 4

切替4類型間での得点比較



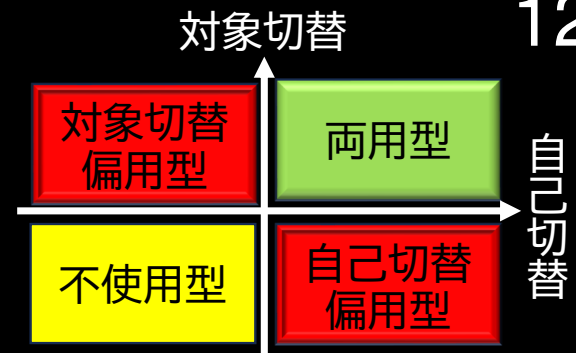
注) 左から不使用型, 対象切替偏用型, 自己切替偏用型, 両用型。エラーバーは95%CI。グラフの縦軸は各指標の得点可能範囲。LSO-Eは因子分析の結果, 2項目を除外した5項目で得点化した。

➡ 仮説 1を不支持, 仮説 2を支持, 仮説 3を不支持, 仮説 4を不支持。

- ・不使用型の者は, 多様性志向が低い訳ではない (教心66でも検討)。相互理解の難しさ・人間の個別性への気づき, 精神的罪悪感, および対人摩擦の経験頻度が低い。
- ・自己切替偏用型は精神的罪悪感が高い訳でも, 友人数が少ない訳でもない。

討 論

12



不使用型は，青年前期以前に多い情緒的・依存的融合状態（落合, 1974）にある可能性が高く，自己抑制的な対人摩耗の経験頻度が低い。精神内的罪悪感の低さは視点取得能力の低さを示唆（大西, 2008b）

- ➔ 適応的というよりも，ナイーブな人物像が浮かび上がる。
- ➔ ・ 不使用型の人々の適応感の高さを，どのように考えるか？
- ・ 不使用型の人々が高い適応感を感じる社会を，どのように考えるか？

自己切替偏用型に伴う性格的・環境的特徴の手掛かりは得られなかった。要・再検討。

- Faul, F., Erdfelder, E., Lang, A-G., & Buchner, A. (2007). G*Power 3: A flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. *Behavior research methods*, 39, 175-191. <https://doi.org/10.3758/BF03193146>
- 藤原 美聡・石田 弓 (2011). 大学生における友人関係機能と孤独感の関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 9. 107-115. <https://doi.org/10.15027/31662>
- Hartup, W. W., & Stevens, N. (1997). Friendships and adaptation in the life course. *Psychological Bulletin*, 121(3), 355-370. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.121.3.355>
- 橋本 剛 (2005). 対人ストレス尺度の開発 人文論集 (静岡大学人文学部人文学科研究報告), 56, 45-71. <http://doi.org/10.14945/00000492>
- 堀 啓造 (2005). 因子分析における因子数決定法——平行分析を中心にして—— 香川大学経済論叢, 77(4), 35-70. <https://kagawa-u.repo.nii.ac.jp/records/6496>
- Matsushima, R. (2016). The relationship between situational change and selectiveness in friendships for adjustment to the university, *International Journal of Adolescence and Youth*, 21(3), 356-36. <https://doi.org/10.1080/02673843.2013.844179>

- 落合 良行 (1974). 現代青年における孤独感の構造 (1) 教育心理学研究, 22(3), 162-170.
https://doi.org/10.5926/jjep1953.22.3_162
- 落合 良行 (1983). 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究, 31(4), 332-336. https://doi.org/10.5926/jjep1953.31.4_332
- 大西 将史 (2008a). 青年期における特性罪悪感の構造——罪悪感の概念整理と精神分析理論に依拠した新たな特性罪悪感尺度の作成—— パーソナリティ研究, 16(2), 171-184. <https://doi.org/10.2132/personality.16.171>
- 大西 将史 (2008b). 特性罪悪感の特徴に関する研究——Big Five, 共感性および規範に対する脅迫的遵守傾向との関係—— 心理科学, 29(1), 80-95.
https://doi.org/10.20789/jraps.29.1_80
- 大谷 宗啓 (2007). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替——心理的ストレス反応との関連にも注目して—— 教育心理学研究, 55(4), 480-490.
https://doi.org/10.5926/jjep1953.55.4_480
- 大谷 宗啓 (2013). 大学生の同性友人関係における状況に応じた切替——社会的スキルとしての効果性と教育上の課題—— 大阪電気通信大学人間科学研究, 15, 79-93.
<http://id.nii.ac.jp/1148/00000110/>

引用文献と使用した統計ツール_3

- 大谷 宗啓 (2019). 大学生にとって友人関係における状況に応じた切替とはどのような体験なのか——自由記述と半構造化面接によるボトムアップアプローチ—— 滋賀大学教育学部紀要, 68, 99-113. <http://hdl.handle.net/10441/00015756>
- 大谷 宗啓・渡部 雅之・若松 養亮 (印刷中). 大学生・成人の心理社会的発達と同性友人関係における対象切替・自己切替・対人ストレス—経験頻度の関連——対象切替と自己切替の交互作用に着目する必要性—— 青年心理学研究, 36(1), 1-25.
- 芝崎 良典・芝崎 美和 (2020). ひとと理解しあえるという思いと孤独感との関連 日本教育心理学会第62回総会発表論文集, 260. https://doi.org/10.20587/pamjaep.62.0_260
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73. <http://hdl.handle.net/11150/10815>
- 菅原 健太 (2011). 高校生における自己の使い分けと友人関係の使い分け 現代社会学研究, 24, 43-61. <https://doi.org/10.7129/hokkaidoshakai.24.43>